

舞台技術セミナーvol6

空間を聴く・空間をイメージする

主催：アーツカウンシル東京/東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)

共催：一般社団法人日本舞台音響家協会

協力：公共劇場舞台技術者連絡会

日時：2016年5月24日(火) 10:30~17:30

会場：東京芸術劇場プレイハウス

参加者数 事前申し込み 135名 当日申し込み・関係者を含めて約 160名



(白神課長の開会の挨拶)

3部構成のセミナーで、それぞれ実際の公演での実例報告を元に、空間を意識しイメージする「空間音響演出」が舞台音響の本質であることを解説するセミナーであった。

第1部 空間音響演出の歴史と多様なホールでの音響の実例

プレゼンター・東京芸術劇場舞台管理担当係長 石丸耕一

劇場は空間であり固有の響きを持つ。特にコンサートホールは楽器であって、舞台音響は空間を意識する「空間音響演出」がその本質である。電気の無い時代から先人たちによって連綿と受け継がれてきた空間音響演出への努力と工夫を、再現・実演を交えて検証した。また、昨年度の「井上道義×野田秀樹『フィガロの結婚』ツアー」での音響デザインの報告を通じて、ホールの響きを生かした空間音響デザインの解説を行った。



(電気の無い時代の大型擬音道具)



(江戸時代の鉄砲の効果音の立体音響演出の再現実演)



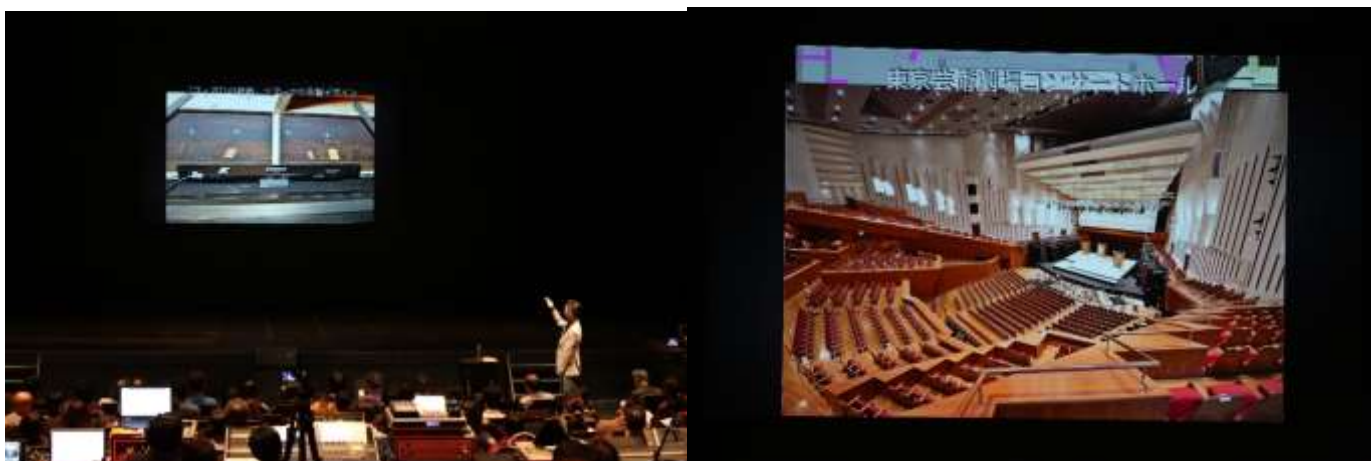
(1930年代の飛行機の音響効果の再現実演)



(1950年代 音の出ているスピーカを移動させる音像移動の再現実演)



(1980年代以降 クロスフェードの連続による音像移動の実演)



(オペラ「フィガロの結婚」ツアーの実例報告)

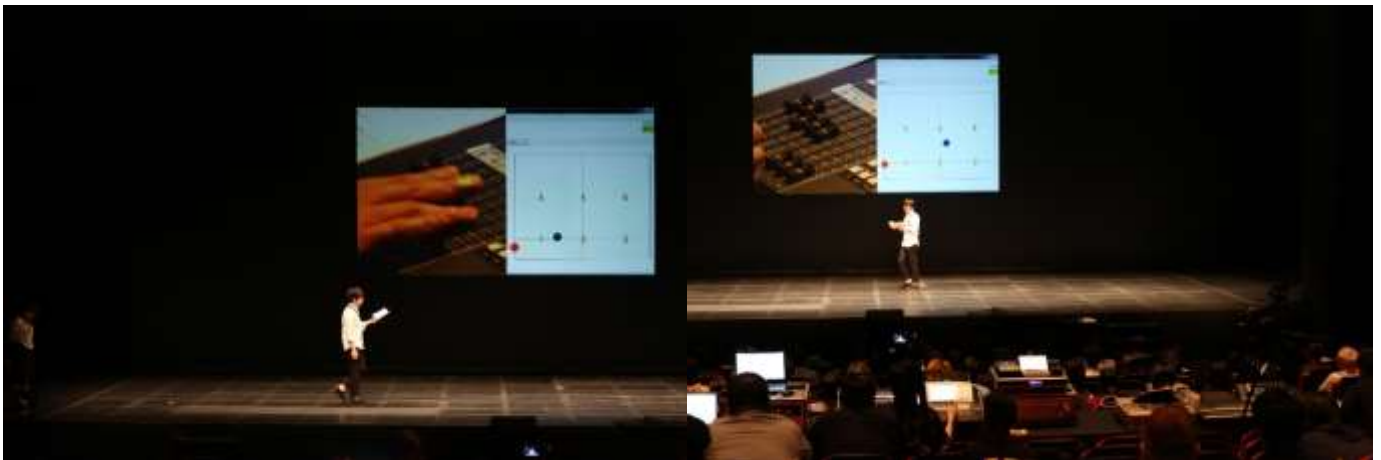
第2部 マルチ再生による効果音の実例

プレゼンター・新国立劇場 音響課長 上田好生

日本舞台音響家協会 渡邊邦男

SC アライアンス 飯塚昌弘

昨年11月に新国立劇場で「ミュージカル『パッション』」に使用されたTiMax 画像定位置移動プロセッサの実例報告を行った。出演者の舞台上の立ち位置や移動に自動追従する機能を実演し、「出演者の居る所から声が聴こえる」「動きに合わせて声も移動する」空間音響演出が、観客にとって舞台に意識を集中させ人物と作品世界に感情移入させる効果を確認した。



(TiMax の実演)



(TiMax 舞台側のセンサー設置状況の見学)

第3部 映像移動効果機器の比較

プレゼンター・サラウンドプロセッサ System6000

東京芸術劇場舞台管理担当係長 石丸耕一

ミュージカル「100万回生きたねこ」音響デザイナー 松木哲志

ムービングスピーカ K-Array KW8

ライブギア株式会社 平塚弘一

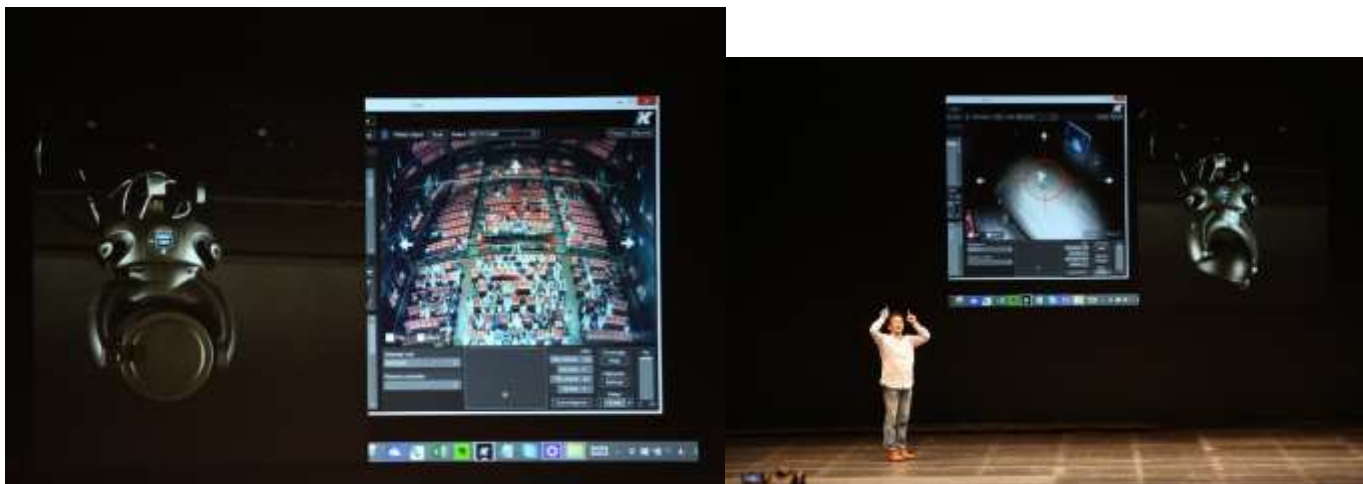
2012年にリニューアルオープンした東京芸術劇場プレイハウスに導入された System6000 サラウンドプロセッサが、その後4年間で実働してきた数々の公演を紹介し、サラウンドをはじめとする空間音響演出機器が劇場に常設されていることの必要性を解説。続いて2012年、2015年に上演された「ミュージカル『100万回生きたねこ』初演・再演」での、System6000を使用したサラウンド立体音響演出を、実際にリハーサル時に作り上げて行ったプロセスを再現し体験した。公演関係者でなければ立ち会えない「公演の音作りの現場」に立ち会えたことと、デザイナー松木氏によって「客席の壁が消えて行き作品世界の音空間が広がって行く」サラウンド空間音響演出を体験できたことは参加者にとって貴重なことであった。

続いてムービングライトの駆動機構を応用したムービングスピーカを紹介し、音が出ているスピーカが回転することで位相変化によって起きる音質の変化、スピーカを拡声の機器ではなく音源の一つとして効果的に利用する演出の可能性を体験した。





(松木氏による System6000 サラウンド演出再現プロセスを体験)



(KW8 ムービングスピーカ体験 スピーカ内臓カメラでスピーカの向きを確認)

